総合司会

これより学校法人文化学園文化ファッション大学院大学主催、BFGUファッションウィーク・シンポジウムおよびファッションショーを開催いたします。

開催に先立ち、文化学園理事長、文化ファッション大学院大学学長・大沼淳よりご挨拶申し上げます。

理事長

文化ファッション大学院大学の第４回ファッションウィークを開催するにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

文化ファッション大学院大学は、２００６年に専門職大学院・商業系大学院としてわが国に設けられた最初の大学院大学の一つとして認可され、６年の年月を重ねてまいりました。今から４年前には卒業生の作品を幅広く皆様に見ていただくために第１回ファッションウィークを開催いたしました。

今年もこうして大勢の皆様にお越しいただき、開催できますことを大変うれしく思っております。特にグローバル化を迎えるなか、今回はロシア・サンクトペテルブルクの国立技術デザイン大学およびオーストリア・ウィーンの市立ファッション大学ヘッツェンドルフ校の参加を得まして、両校の学生の作品をあわせてご覧いただけるのは、画期的なことと思います。

さらに今回は基調講演として三宅一生先生をお迎えしました。私はこの学校にきて５０年目を迎えますが、実はその最初のときに先生にお会いしています。本学には雑誌「装苑」「ミセス」を出している文化出版局がありますが、その責任者として広く知られた今井田勲氏も、当初より三宅先生を高く評価しておりました。さらに、ワコール創業者の塚本幸一さんもかつて、「この三宅は将来必ず日本を背負って立つデザイナーになる」とおっしゃっていた記憶があります。

その期待にたがわず、三宅先生は国際的に活躍するようになった日本人デザイナーのパイオニアとしてデビューされ、過日は文化勲章までいただくという、まさに一時代を築いた方です。最近では、大学で講演されたことがないということでしたが、今年ついに本学で講演が

実現いたしました。そのようなことも併せて今回の特徴として、ご紹介しておきたいと思います。

当ファッション大学院大学では、当学の卒業生を三宅さんはじめ各ブランドのデザイナーの下で、日本のファッション界の次代を担う人材として育成していただいております。これからも引き続き、産業界としっかりコラボレートして、国際社会に新しいクリエイティブなファッションを提供していく、そういう日本の国を創っていくのが大事だと確信いたします。その根幹である人材の育成にこれからも邁進していきたいと思っております。

おかげさまで本学は同じ頃に出発した商業系大学院の中でも、大変健全に歩みを続けてきております。定員は１６０名ですが、それが常に満杯になっており、なおかつ絶えず４割を超える留学生がこの学校に来ております。国際的な色彩も一段と強くなりました。

今日お越しくださった皆様方にいろいろとお世話いただいた結果として、現在の地位があると考えております。今後とも引き続きそういった趣旨をご理解の上、ますますのご支援をたまわらんことをお願い申し上げて、ファッションウィーク開会にあたってのご挨拶にかえたいと思います。ありがとうございました。

総合司会

開演に先立ちましてシンポジウムの位置づけをご説明いたします。総合司会を務める教学事務室の横倉です。よろしくお願い致します。

このシンポジウムは、BFGU ファッションウィークの中で、次の時代のファッションビジネスの方向性を議論する場として位置づけられています。テーマは「技術革新と未来」です。今回はクリエイターの視点から、そしてものづくりの現場から、ファッション分野の技術革新の意義と今後の可能性を探ります。付け加えますが、このホールの耐震設計は万全です。万が一地震が起きましても、係員の指示に従って、慌てずに行動してください。

それではシンポジウム第１部基調講演をデザイナーの三宅一生様にお願いしたいと存じます。三宅様のご紹介は本大学院大学研究科長小

杉が担当いたします。

ファッションビジネス研究科長
小杉　早苗教授

皆様こんにちは。小杉でございます。今日は私が親しくお付き合いいただき尊敬しております三宅一生先生にお越し願いました。

私は先生をお訪ねするたびごとに感じることがあります。先生の発する言葉の一つ一つを聞くたびに、ここにたくさんの学生がいたらいいのになあ、みんなに聞かせたいなあと思います。さらに、中で働いているスタッフの方々のチームワークの良さやひたむきさ、誠実さ、それへの感動をひしひしと感じるのです。

先生は最初から服飾デザインを文化の域にまで高めようという大きな志を持っておられました。それが一昨年の文化勲章受章という形になって表れたのだと思います。私どもにとっても大変誇りに思うことですが、先生は賞だとか受賞だとかこだわらず、さらに先へ先へと革新の作業を進めておられます。

本日は先生から直接お聞きできる一言ひとことを大切に感じ取ってまいりたいと思います。ご講演のタイトルは「ものづくりの力と心」です。先生よろしくお願いいたします。

三宅先生

皆さんこんにちは。

Welcome to TOKYO from Sankt-Peterburg and Vienna, Austria.

英語の挨拶は一言にしておきますが、英語は大変大切なので、日本の方でもこれから世界で活躍しようというなら是非マスターしたらいいと思います。

さて今日は、われわれが実際にとりかかっている現在進行中の仕事をご紹介したいと思います。

そこに座っている白いシャツの青年、高橋悠介君は、この大学院大学の卒業生で、われわれのチームに入って２年になります。今日は僕をサポートしてくれます。

「ものづくりの力と心」とは

「ものづくりの力と心」という今日のテーマです。確かにわれわれはコンピューターをはじめとしてさまざまなテクノロジーを用います。素材にもシーラー加工やプリーツ加工を加えます。会社の中にそれらの機材、作業場があるのでスピーディーにできるのですが、それに頼りすぎるとちょっと違うぞという感じが最近特にしております。

「ものづくりの力と心」というのは、言い換えたらどのように言えばいいでしょうか。僕は「頭脳力」と「手工業」、手工芸ではなくて手工業と訳したのですが、それらの点について、僕自身の歩みを振り返りながらお話ししたいと思います。

①（スライド：駅のホームに立つ学生服姿の三宅氏）

皆さんもこういう時代があったと思うのですが、これは私が高校３年生、１９５７年に美大の講習会に行く途中、四ツ谷駅で下車して撮った写真です。皆さんよりちょっと若いと思うのですが、この時に「自分は将来どうしようか、どういう形で生きようか」と考えていました。ちょうどその頃、文化服装学院が男子生徒の募集を開始したのですが、まだ服をやる決心がつかなかった私は、総合的な勉強が必要だと考えて多摩美術大学に行きました。今で言うグラフィックデザイン、当時は図案科といった時代ですが、そのような勉強をはじめる前の高校生の姿がこの写真です。

「世界デザイン会議」の会報に、「服飾デザインは含まないか」と題した僕の意見が掲載されました。「世界デザイン会議」とは、１９６０年、僕が大学１年生の時、東京で行われました。しかし、建築・グラフィック・プロダクトとさまざまなデザイン分野が入っているのに衣服分野が入っていない。これはどういうことなのでしょうか、と意見

をまとめ、先程の大沼先生のお話にも出てきた文化出版局長の今井田勲先生に手紙を書きました。通産省の役人や建築家の坂倉準三先生にも書きました。

その時に最初に動いてくださったのが今井田先生でした。先生はとても大きな視野を持った方で、衣服という分野だけにとどまらず社会的な発言もよくされていた。当時の文化出版局はよくストライキをやっていたという記憶があります。そんなたくましい編集者たちがたくさんいる時代でした。

この今井田先生とジャーナリストの青木さんという方が動いてくれたおかげで、世界デザイン会議にファッションが参加できました。普通はデザインというと衣服デザインを含むのに、何故ここでは疎外され排除されたのかと不思議に思ったのです。改めて考えてみると、これはもしかしたら面白い仕事なのではないかと。世の中は認めていないし、仲間も認めてない……、じゃあやってみようかな、と心が半分動いたのです。

在学中から「装苑賞」に応募し〔1961 年、62 年と連続佳作受賞〕、いろいろな先生にお会いして楽しいときを過ごしました。特に印象的だったのはマダムマサコさんに白いコートのデザインを採用してもらったときのこと。それを先生に見せに行ったらパッと自分で着てみて「あら、これ着にくいわね」とおっしゃる。そうか、服というものは着やすくないといけないのだと。そこから着やすいこと、気持ちがよいこと、機能的であることをわれわれは忘れがちなのだ、それではいけないと思い知らされました。特にモードという世界には、優先しなければならない順位があるのですが、そういう意味で非常に衝撃的な出来事でした。

②（スライド：東レとキヤノンのカレンダー）

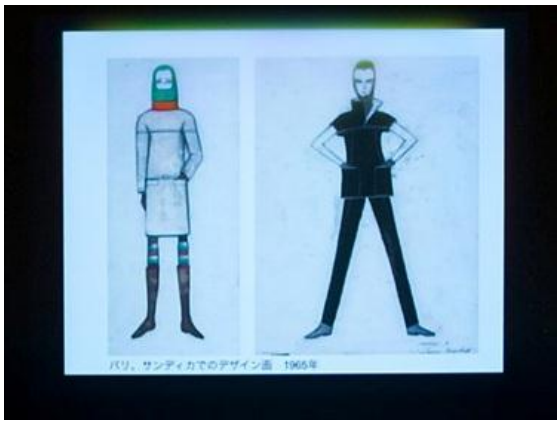
大学に行き始めてすぐのころ、東レのカレンダー〔左・１９６２年制作〕ですが､その後、東京オリンピックのポスターをつく

ったアートディレクターの村越襄さんが僕の作品を起用してくださったものです。右はキヤノンのカレンダーで、６４年用だと思います。

僕は無言のうちにたくさんの人からいろいろなことを教えていただきました。このカレンダーを作るにあたっては、白洲正子さんから丹波木綿を教わりました。当時正子さんは銀座で「こうげい」という染色工芸の店をやっていらして、僕も頻繁に通っていた。そのうちに「あなただあれ？」と聞かれるようになり、一言二言とお話しする機会が増えました。そこで受けた正子さんの影響で、これ〔東レのカレンダーの衣裳〕は丹波木綿の浴衣地と東レのポリエステルを使った。そういう出発をしました。

そういった出会いのなかで、何も知らない自分をさまざまな形で思い知らされたのです。そこでビザが下りるようになった１年後、１９６５年にパリへ発ちました。

③（スライド：パリ、サンディカでのデザイン画）



これはパリのオートクチュールの学校、サンディカ〔パリ洋裁組合学校〕で描いたデザイン画です。以前はたくさんあったのですが今は少なくなってしまいました。ここまで丁寧に描いているかは分かりませんが、皆さんもきっとこういうことを勉強しているのではないかと思います。こういう教育を受け、カッティングも７、８カ月の間ですが勉強しました。

それからオートクチュールにアシスタントとして入りました。五月革命（１９６８年）までの２年間です。しかし、そこで僕はこのオートクチュールという特殊な世界では自分は生きていけない、と考えはじめました。この仕事はフランスに生まれ、ヨーロッパに生まれた人たちだけにしかできないだろう、と。それでも将来はニューヨークに行くと決めていたので、もう少し勉強してからでも遅くはないかと２

年間は続けることにしたのです。

ここパリで、五月革命が僕の進路を深めてくれたと思います。革命の中、学生や労働者などさまざまな人がオデオン座やサン・ミシェルあたりに集まって議論をするわけです。まだフランス語はよくわかりませんでしたが、その様子にすごく興味があってよく行っていました。みんな地面の敷石、パヴェ pavé と言いますが、それを剥がして警官隊に投げつけたりもしていました。もちろん僕はそういうことは一度もせず、無事でしたが（笑）。

そんなパリを覆い尽くす巨大なエネルギーに触れたことが大きな転機になり、再びオートクチュールの世界に入って基本的な勉強をし直しました。一番尊敬しているバレンシアガがちょうど店を閉めるときだった。縁あって入ったジバンシィで、完成した服を絵に描く仕事〔デシナトゥール〕を始めました。いわゆるアシスタントではなく、お客さんやジャーナリスト、百貨店に対して絵を描く。その当時はポラロイドカメラもまだなく、もちろん現在のような便利なものは全くないので、全部手でスケッチを描いていたのです。

日本でのファッションデザインの歩み

そこを 1 年で辞めて大阪万博の前年に日本に帰り、翌 1970 年、すぐに「三宅デザイン事務所」を設立しました。まだどういう形でやるか手探り状態でしたが、とにかく日本で、会社を立ち上げてデザインの仕事をしてみた。そのときにびっくりしたのは、たった 4 年いないだけで日本が大きく変わっていたこと。力を蓄えた国、熱い国に変わったことでした。

そして「一生さん一緒にやろうよ！」とみんなが言ってくれた。ここには可能性があるなと思いました。

もうひとつ、将来を考えたときに――今日はロシアの方もいらっしゃるし、オーストリア、中国や韓国の方もいらっしゃいますが――、自分たち独自のものを持っていないとデザイナーにはなかなかなりにくいと思う。僕は最初からインターナショナルな仕事をしたいという考えがあったので、ヨーロッパにくらべてテクニックやテクノロジー

ではまだまだ遅れていた日本で敢えてそれをつくろうと始めたわけです。

⑤（スライド：１９７０年作「タトゥ」photo:篠山紀信と１９７１作「刺し子」photo:十文字美信）

そのときに基本にしたのが人間の身体や動き。そういうものからデザインを広げていった。左の写真「タトゥ」は１９７０年に横浜の彫物師大和田光明さんからいろいろと教えていただいて制作しました。左側、後ろ向きの女性が着ているのはジャニス・ジョプリンとジミ・ヘンドリックスをデザイン化したもの。僕からのオマージュですね。

「刺し子」は日本の布地で何かオリジナルなものを作ることによってジーンズやＴシャツと同レベルになることを目指そうと。キルティングや刺し子、両面コットンなど、そういうものから始めていきました。

⑥（スライド：１９８０年作「プラスティック・ボディ」photo:Daniel Jouaneau と１９８５年作「ゴボウ状フリンジのコート」photo:繰上和美）

「プラスティック・ボディ」は、自分でボディを作りウェアラブルなものなので、パッとはめて着ることができます。

それと「ゴボウ状フリンジのコート」。ちょうどコンピューターが入ってきた時代です。これはコンピューターを使って作ったもので、われわれはゴボウと呼んでいますが、ゴボウとかニンジンだとかそうい

うテーマでやった仕事です。当時からいつもボディを中心に考えていました。

⑦（スライド：１９９４S/Sパリ・コレクションフィナーレの写真）

私はそれこそ３０年前から、将来絶対にジーンズとTシャツの時代が来ると思っていました。汎用性の高い服の時代が来る、男も女も同じ物を着るようになるだろうと考えていました。

そして７０年代、８０年代を経て１９９０年にウィリアム・フォーサイスと出会って彼が振付を担当していた〔フランクフルト・バレエ団〕のダンサーと会ったのです。これは凄い人たちだと思いました。

⑧（スライド:「PLEATS　PLEASE」１９９４S/Sカタログ写真）

彼らは踊る時にタイツの代わりにこれを着けた。これが「PLEATS PLEASE」のはじまりで、誕生から２０年経ちますがいまだに世界中で着られています。まさに基本形ですね。単純な物ほど難しいものですが、いろいろと組み合わせて着ることによってその人の味が出るんです。これも一つのボディ作りと言えるでしょう。

⑨（スライド：A‐POCロゴ）

次は「A-POC（エイ・ポック）」です。１９９４年に非常に才能のある青年〔藤原大〕がわれわれの

仲間になり、彼をニット担当にしたんです。なかなかユニークなアイデアだと思うのですが、彼はどこの紹介も受けずに日本国中のあちこちのニット織りの機械を見て回った。そしてハマグリで有名な三重県桑名にある魚網（魚を捕るための網）を織る機械と出会い、そのテクニックを使った「A－POC」をスタートしました。

ニューヨーク近代美術館（ＭｏＭＡ）にもＡ－POC は所蔵されています。今まではボディを作ってそれを着せるという考え方でしたが、これはボディが中に入るという考え方です。これは今でも続けていて、布帛にも広げています。どうしても方法論としては大量につくらなければいけないということもあり、できるだけ形はシンプルに、機能的に作ることでロスをなくしたかったのです。

⑩（スライド：21_21 DESIGN SIGHT の写真）

ここに映っている建物はたぶん行ったことがある人が多いのではないかと思います。実は朝日新聞にデザインミュージアムを作りたいという僕の記事が載り、それに対して三井不動産から、計画中の六本木の東京ミッドタウンに同コンセプトのものを造りたいとの申し出がありました。そして安藤忠雄さん設計による一枚の布のような形の建物ができました。21_21 DESIGN SIGHT です。現在〔２０１１年９月１６日～２０１２年４月８日〕は「アーヴィング・ペンと三宅一生 Visual Dialogue」という展覧会をやっています。

21_21 DESIGN SIGHT という名前ですが、トゥーワンというのは２１世紀という意味のほかに、2.0 が完全な視力を表すならばデザイナーはもっと先をみる目、つまり 2.1 が必要だという意味を込めてトゥーワントゥーワンとつけました。「ニジュウイチニジュウイチ」と読む人もいるし、「トウェンティワントウェンティワン」という人もいます。みなさんにそれぞれの国の言葉で呼んでいただいて、これはかなり世

界的にも有名になりました。

東日本大震災が教えたこと

⑪（スライド：「東北の底力、心と光。」のポスター）

昨年の東日本大震災に私はすごく強く感じるところがありました。それはやはり原発というものの存在。これは津波が原因ではあるが元をただせばやはり原発であると思う。原発はあってはならない、日本人は過去に広島、長崎で〔被曝を〕経験しているのに、なぜ止めないのだという気持ちが強くありました。そして何とかして日本文化の原点である縄文文化、それがもっとも栄えた東北地方に感謝を表しながら再び一緒に仕事をしたいと。「東北の底力、心と光。」と題して 21_21 DESIGN SIGHT で展覧会を開催しました。急なことでしたが資料を集め、皆さんにもお願いして参加していただいたわけです。

われわれの服作りも過去を振り返ると青森とか岩手、宮城、福島、秋田、新潟の人たちに大変お世話になっています。苦労したけど良い服だったなぁというのはだいたい東北で作られている。なぜかというと彼らはものすごい根性がある。そういう感謝もこめた展覧会でした。

⑫（スライド：展覧会の様子）

われわれが今できることというのは何だろう。もちろんあちこちで箱があれば義援金を入れてきましたが、それ以上に東北の人たちを知ってもらうことが重要と思いました。でしたし、知ってもらってそこで参加する

人たちが増えてくれればよい。東北だけでなく日本全国にこういった産地はあるのですが、なかなか見る機会がないので、この展覧会をやったのです。

ここで展示しているのはゼンマイ〔若葉の綿毛に木綿を混じて糸をつくる〕、シナノキ〔皮で布の原料をつくる〕、トウ（籐）など、東北の伝統的素材です。例えば東北には木綿がなかったので、木綿が非常に貴重品だった。木綿の糸を使ってこぎん刺し〔青森県津軽地方に伝わる刺し子技法〕をはじめさまざまな物を作っていた。紙衣（かみこ）と呼ばれる和紙を原料とした着物がありますが、宮城県の白石では紙衣を糸よりにして着物をこしらえて実際に殿様が着ていたとか、兵隊の軍服を作ったとか。そういう意味で東北の人たちの発想能力は素晴らしいなと思います。

⑬（スライド：日本家屋の写真）

これは宮城県白石の素晴らしい家なのですが、震災が起きたその日に電話をしたが通じない。その翌日に電話したら家主の遠藤まし子さんが電話に出られたので「大丈夫ですか？」と尋ねると「大丈夫。３５０年前に建ったこの家は大黒柱がしっかりしているので平気です」とおっしゃる。

⑭（スライド：３人の女性が紙すきをしている写真）

そんなことがあってぜひもう一度遠藤さんとお仕事をしてみたいと思い、白石まで何度か出かけました。この写真は紙をすいているところですね。楮（こうぞ）とい

う紙の繊維です。冬に行われることが多いのですが、ミツマタを細かく砕いてから冷たい水の中で女性たちが紙すきをやる。すごく厚みがある紙で、奈良の東大寺のお水取りのときの僧服として使われます。紙衣は柿渋で染めて、さらにその上にトロロアオイの糊をのせることによって、シットリさせると同時に腐らなくなり、防水加工ができる。２００～３００回、石の上で揉むので、非常に丈夫な和紙ができます。

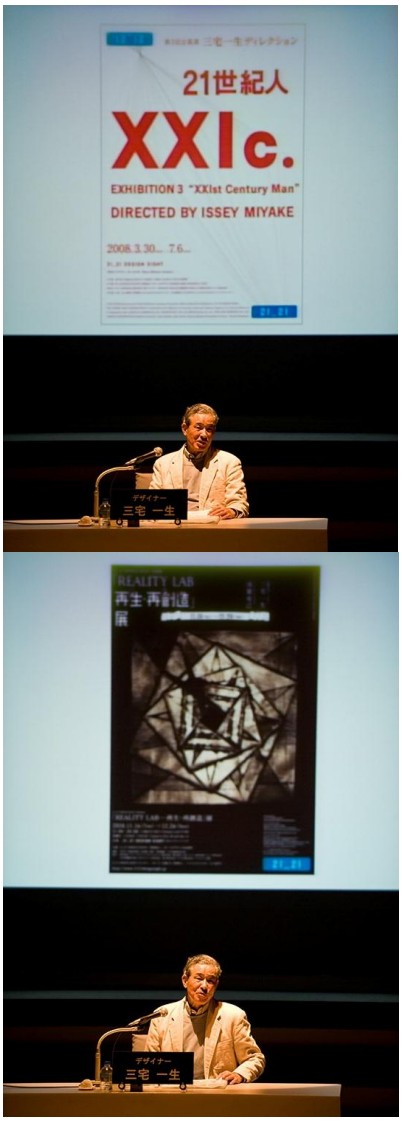
⑮（スライド：風呂敷を背負う遠藤さんの写真）

これは遠藤さんが東大寺に行くとき、白石から東大寺まで紙を持っていって東大寺の長老にお渡しに行く姿を写真に撮ったものです。今年は２月１０日に紙を東大寺に納めにいきますが、その和紙を使って紙衣をつくります。お寺の中では読経が２４時間続き、二月堂の上では松明を持った僧侶たちがぐるぐる回っていく。僧侶たちは紙衣を着てその上から水をかぶると火傷しない。まあ少しは煤が着き、焦げますが（笑）。そういう身を守る着物をこの和紙から作るのです。遠藤まし子さんの仮のモデルをやってくれたのは、文化服装学院を５５年ほど前に卒業した、僕の相棒です。

21 世紀に問われる再生・再創造

⑯（スライド：「２１世紀人ＸＸＩｃ.」のポスター）

２０世紀、人類は、文明がさまざまなものを創りだし、月に行き、ウォークマンやｉMac ができたと大喜びしていたが、これからは逆にそれが負担になるでしょう。人口も増え資源を再利用しなければなら



ない。そこで私は再生・再創造という考えを持つようになりました。

⑰（スライド：再生・再創造展のポスター）

これがそのポスターですが、浅葉克己さんがこのポスターとロゴをつくってくださいました。

再生繊維はいろいろなところで研究・開発されていますが、その中でも「エコサークル」という帝人の技術力は非常に高く、日本で一番だと思います。その帝人でも特に優秀な方々に集まってもらって、この再生繊維をアップグレードしたいのだがもっと良くするにはどうしたらよいか、と相談して研究を進めてもらいました。

（帝人の「エコサークル」製造風景の動画）

繊維メーカーにもそれぞれ得意分野があって、ポリエステルの場合は帝人、ナイロンは東レが強い。ただ最近で残念なのは技術や機械が海外に流出してしまうこと。定年制の影響もあり、一番熟練した５０代、６０代の人たちが機械とともに海外に移住してしまう。そうすると生産が日本国内ではできなくなる。

われわれの抱える問題のひとつは、地方の産地などを訪ねると、工場が以前は２００も３００もあったが、今ではたった１軒か２軒になってしまったこと。これは福井県の工場で、帝人が作った糸を加工して織っているところです。

（会場を見渡して）こういう現場に皆さんもぜひ足を運んでもらいたい。もっと言ってしまうと、こうした現場で働くのも面白いと思いますね。デザイナーばかり出てきても、基礎がないと、結局はすぐダメになってしまう。こういうことを知っていると、現場に対する尊敬の念がでてくるものです。

（現場からのコストと品質の間のジレンマ、機屋の倒産など苦しい現

状を嘆く声が流れる）
……これが現実なのですが、あえてわれわれは難しいところにこそやる意味があるのではないかという姿勢で挑戦してきました。これは「132 5. ISSEY MIYAKE」という製品です。後でモデルさんが着て出てきます。
（染色作業の動画が始まる）
　これは石川県にあり、ここで染められた素材に手を入れるために、宮城県の白石、真室川〔山形県〕、あるいは東京のあきる野市に持っていきます。そこでは全く機械を使わずに全部手でプリーツを入れていく。こういった作業をする工場がほとんどなくなってしまいました。
（縫製作業の動画）
　これはわれわれの東京・江東区の新大橋にある工房です。こちらの山本さんというテクニカルの指導者とともにさまざまな、自分たちの仕事が進んでいきます。
（立体的な折り紙が並んでいる動画）
　これは一体何だろうと思われるでしょう。われわれも単純なものは作れますが、こういった複雑なものを作るには、こちらの筑波大学の三谷純先生の力が必要でした。三谷先生の作ってくれた立体折り紙を、われわれは１回つぶしてしまい、それから山折りと谷折りだけでもう一度形にしていきます。
　ここで働いている女性たちは縫製という裏方の仕事を本当によくやってくれています。すてきな女性が多いです。こうやって形を作りながら、しるしにそってプリーツを入れていきます。最後にこれを圧縮プレスして形ができます。
（最終工程の動画）
　これでまだ終わらずに、東大阪の、ここも１軒しかない工房で、強さとインパクトを出すために箔を載せる。それで出来上がりですが、さらにわれわれがもう一度検品を行います。プロダクトという形をとっていますから、絶対に失敗してはいけないのです。細心の注意をはらって検品していかなければならない。その仕事をこれから見ていただきたいと思います。
（完成品の紹介動画）この立ち上がっているのがわれわれのつくった

パターンです。この形でワンピースやボレロ、バッグも同じパターンを使って作っています。今年この形を応用したランプシリーズがミラノで発表されます。「陰影」という名前です。
（別パターンの動画）これも変な形をしていると思われますが、三谷先生の型をつぶして作りました。
加工技術によってアコーディオンのように左右に開く、これは上も下も同じ形をしています。
次は扇のような形をしていますが、実は袴式のパンツです。これに組み合わせるバッグも同じような発想でつくりました。ペッタンコになるんですよ。これは旅行にも便利だし、収納にも便利です。ペッタンコにして自分の荷物にクルクルと入れておけば良いわけです。
僕がいつも考えているのはどうしたら取り扱いしやすいか、収納しやすいか。これは洗濯機で洗っても手洗いでやってもそのまま保つことができます。

大学院生の方たちは、いわゆる文化服装学院の基礎コースとちょっと違うと思いますが、ぜひ社会的な役割がある仕事を見つけていただきたいと思います。デザイナーという仕事はこれからどんどん難しい時代を迎えますが、それでも夢は失わないでほしい。何とか自分の役割を見つけてもらいたいと思っています。

僕のところでは今度新しく若いスタッフで作ってみよう、自分たちに何ができるか考えてみようと４人の若者が集まってきました。先程の山本、素材つくりの菊地が参加しています。加えて小笠原、天野という大ベテランの女性が会社に残ってくれて、一緒に勉強してくれる。勉強というか、われわれの場合だと「学び合う」という形ですね。

それで若手スタッフたちを「青年隊」と呼んでいる――最初はボーイズと呼んでいましたが、だんだん僕よりも知識が豊富になってきたので、最近は格上げして青年隊と呼ぶようにしているんですが、そうすると何となく僕もその中に入れてもらえるような気がしています。

（ここで、三宅氏の勧めにより、「132 5. ISSEY MIYAKE」の「青年隊」4名の自己紹介が行われる）

話をするのはなかなか難しい……と今日も思いました。我々はあちこちに仕事を見ていただける場所がありますので、遠慮せずにそういったブティック、美術館などへ行き、そこの人たちに聞いて欲しい。彼らもそれを待っていますから、ぜひそういった人とコミュニケーションしていただきたいと思います。

最後に、これからのデザインは社会とのつながりを無視することはとてもできません。

この間、楽しい面白い展覧会を見ました。オペラシティで行われた「考える服、感じる服」というものです。ただ、参加デザイナーたちは非常に才能はあるが、素材感が希薄な部分がある。なかなかつくることができなくなってきている時代、これは何とかしなければいけないなと思いました。

ただしそうだからといって、例えば1年に1回、学生の皆さんの作品を見せてもらうことがありますが、薬品をたくさん使って腐ったような臭いがしたり、とにかくすごいモノが多い。環境破壊にもなるので、やめたほうがいいと思います。日常の中から、社会で求められることを学んでほしいと思うのが僕の考えです。

長くなりましたが、これで僕のレクチャー、おしゃべりを終わります。ありがとうございました。

総合司会

三宅先生ありがとうございました。